仲間と親とあゆみ続けて

――32年間の障害者福祉実践

第5回　仲間の余暇活動と自治会活動

ゆたか希望の家相談支援事業所
佐藤さと子
さとう　さとこ／日本福祉大学卒業後、社会福祉法人ゆたか福祉会に勤める。全障研愛知支部事務局長

あかつき共同作業所に転勤して5年目の1999年、私は重度の仲間たちの現場から離れ、自主製品のパンやクッキーをつくる「アトム現場」に異動しました。仕事の中で仲間たちがどうやって力を発揮すればいいかを考え、売上げを上げていくために新しい商品を開発するための研修会や、大阪で行なわれたパッケージを見直すための商品展示会にも参加。商品開発で新たなやりがいを感じながら、仲間の自治会の担当職員になりました。

補助金3割カット?!

1999年、私は全障研愛知支部の事務局長になりました。その頃から愛知では、きょうされん愛知支部、愛障協（愛知県障害者(児)の生活と権利を守る連絡協議会）、全障研愛知支部の3団体で障害児者問題に関する定期的な協議を開始していました。

同じ年の12月、県全体で補助金3割カットの動きが報道されました。併せて、これまで県独自で無料だった障害のある人たちの医療費が有料になることがわかり、すぐさま3団体の定期協議で医療費有料化の反対を求める署名運動にとりくむことが決まりました。そして冬のさなか、12月と2月に県庁前で補助金3割カットに反対する集会を開き、座り込みをしました。職員は徹夜の座り込みも決行。私はその中心的な役割を担うことになりました。

県庁前で、徹夜で座り込みをしたのは愛知の障害者運動でも初めてのことでした。「こんなに寒いなか、障害者に座り込みをさせるなんて県民が見たらどう思うだろうか」――世論を敵にできないという県知事の危機感もあり、障害者の制度に関わる補助金3割カットはすべて白紙、医療費無料の助成制度は今も維持をしています。あの時の寒かった思い出は、毎年冬になると思い出します。

請願署名の県や市への提出や議会傍聴、議員まわりは私にとって初めての体験でした。社会に訴え、自分たちの運動の力で障害者福祉の制度が変わっていくことを初めて実感し、その後の自分の生き方に大きく影響を与えました。

運動の成果を自分たちで実感した仲間たちは、その後、冬のボーナスセールでの所長に対する訴え方もどんどんしっかりしていきました。自分たちの給料を上げるために、週に1回の販売にも力が入ります。

ぜんそくで入院、仕事を続けるか迷ったことも

アトム現場に異動する前のことですが、この仕事を続けていいのかと葛藤した時期がありました。持病のぜんそくと副鼻腔炎とのつきあいがだんだん深刻になったのです。重度の仲間たちの缶現場の時に、痛み止めの薬でアスピリン喘息の発作を起こし、緊急入院。その後、副鼻腔炎2回目の手術もすることになりました。入院中、「作業所の職員の仕事はもうやめた方がいいのではないか」と真剣に悩みました。

しかし、病院で他のぜんそく患者さんの「絶対に仕事は続けた方がいい」という言葉に背中を押され、退院後2日間家で休養した後すぐに復職しました。この仕事を続けるには自分の体調管理も大切だと思うようになった出来事です。

社会経験を広げる余暇活動

退院後は、職場の配慮で体力の必要な缶現場から下請けの仕事の軽作業現場に移り、そしてその後、アトム現場に異動しました。アトム現場では仲間たちの仕事だけではなく、仲間たちの自治会も担当しました。

余暇活動も大切にし、月に1回の外出のとりくみでは、仲間たちと話し合いで行きたい場所を決めました。外出の際は自分できっぷを購入し、自分で改札機に入れます。電車の乗降など初めての体験も多かったのですが、自分でできたことで自信をつけていき、仲間たちの要求はどんどん広がっていきました。ディズニー・オン・アイス鑑賞、大相撲名古屋場所の観戦、ナゴヤドームへ野球観戦など、いろいろなところに行くようになりました。グループホームの見学に行ったこともあります。

大相撲名古屋場所の観戦に行った時、幕下が横綱をやぶる金星が出て、会場いっぱいに座布団が舞った場面を仲間がうれしそうに報告してくれました。

2003年、支援費制度でヘルパーによる外出が可能になりましたが、それ以前、余暇の活動は作業所での体験しかありませんでした。電車の中で、他の乗客に席をゆずってもらうことはなかなかむずかしかったのですが、あきらめずに何度も経験を重ねていくなかで、少しずつ障害者への理解が広がっていきました。帰りの電車の中、仲間はみんな満足そうな顔で、職員は疲れて眠気とのたたかいだったことを懐かしく思い出します。

「障害者にとって必要な場は『働く、活動する、日中活動の場』『生活する家やグループホーム、入所施設などの生活の場』そして『余暇の場』の3つである」。大学の大泉ゼミ